様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月７日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：２００９　～　２０１１
課題番号：２１５２０４４０
研究課題名（和文）　消滅の危機に瀕した中国甘粛省，青海省のモンゴル系孤立諸言語にかんする調査研究

研究課題名（英文）　A Field Study on Endangered Mongolic Languages in the Gansu and Qinghai, China

研究代表者
佐藤　暢治（SATO NOBUHARU）
広島大学・北京研究センター・准教授
研究者番号：９０２６３６５７

研究成果の概要（和文）：
中国甘粛省，青海省のモンゴル系孤立諸言語に位置づけられる保安語積石山方言と土族語互助方言と土族語民和方言は消滅の危機に瀕した言語である。本研究では，消滅の危機にあるそうした言語についてフィールド調査等を通じ，その言語の全体像を社会的・文化的背景とともに記述した。
また，得られた成果を当該社会に還元するための一つとして，保安語にピイインに準拠した文字を策定し『保安語漢語辞典』の試行版を作成した。

研究成果の概要（英文）：
Jishishan Bonan language, Huzhu Tuzu language and Minhe Tuzu language, which are spoken in the Gansu and Qinghai of China, are endangered Mongolic languages. In this study we described the whole state of their languages by documenting their socio-cultural backgrounds.
As one of return our research results to the language community, we made the orthography for Jishishan Bonan language by using pinyin system that can read its speakers and “ Bonan-Chinese dictionary ” to preserve it for the future, as well as to develop literacy.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	800,000	240,000	1,040,000
２０１０年度	800,000	240,000	1,040,000
２０１１年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：言語学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：言語学，危機言語，モンゴル系言語，保安語，土族語，フィールド調査

１．研究開始当初の背景

本研究『消滅の危機に瀕した中国甘粛省，青海省のモンゴル系孤立諸言語にかんする調査研究』で対象とした言語は，黄河を挟んだ近隣で話されている保安語積石山方言（話者：保安族 16,505 人，居住地：甘粛省臨夏回族自治州積石山保安族東郷族撒拉族自治県大河家鎮），土族語互助方言（話者：土族 25,000 人，居住地：青海省互助土族自治県）と土族語民和方言（話者：土族 200,000 人，居住地：青海省民和回族土族自治県）である。

これらの言語は東郷語，康家語，東部裕固語とともに，モンゴル語言語学においては，（狭義の）モンゴル語，ブリヤート語などとは異なり，中国甘粛省，青海省のモンゴル系孤立諸言語に位置づけられている（総称して，河湟語と呼ばれることもある）。それは，モンゴル系諸言語のより古風な特徴を保存継承している点と，異言語との接触による特異な変化という二つの側面を持つことによる。そのため，これらの言語はモンゴル系諸言語の歴史研究，及び言語接触研究においても重要な位置を占める。

現在，これらの言語は消滅の危機にあり，緊急の調査研究が求められている。しかし，まだ十分に記述がなされているとはいえず，またテキスト，辞典などが公刊されていない言語もある。

保安語積石山方言については，研究代表者である佐藤が，2000 年以降これまでに 6 度にわたり保安語積石山方言の調査をおこない，社会的・文化的背景とともに老年層から語彙，例文，民話などを収集している。そのため，保安語積石山方言の研究は Todaeva,B.X.（1964），布和 劉照雄(1982)に代表される先行研究に比べれば，飛躍的に発展したが，新たな発見が次々とあり，問題は山積みである。また，次世代を担う若年層が話す保安語積石山方言は，音韻，語彙，文法いずれにおいても老年層のそれとは著しく異なってきており，保安語積石山方言の今の姿を可能なかぎり，記録にとどめておくことはきわめて重要である。

土族語については，研究分担者である角道がこの十数年にわたって精力的に研究を推進している。土族語互助方言は比較的先行研究が抱負であり，保安語などとくらべれば資料があるが，それでも未解明な問題が多く，公刊されたテキストすべてを現在利用できる辞書だけで読むことはできないという状況にある。

土族語民和方言においては今のところ Todaeva,B.X (1973)，照那斯図 李克郁(1982)，Slater，Keith W.(2003)，Xian Zhen(2001)，Chen Zhaojun et al(2005)を通じて断片的なことしかわからず，全体像を把握するにはほど遠いという状況にある。

２．研究の目的

本研究の主たる目的は三つ。

一つ目は，中国甘粛省，青海省のモンゴル系孤立諸言語に位置づけられる保安語積石山方言と土族語の全体像をフィールド調査を通じて社会的・文化的背景とともに記録し，その調査結果を公刊すること。

二つ目は，得られた成果を現地社会へ還元し，保安族や土族の人々との連携のもと，当該言語における次世代への継承に協力すること。

三つ目は，モンゴル系諸言語の歴史研究，言語接触研究，さらには一般言語学に貢献することである

３．研究の方法

本研究の目的を達成するため，研究期間は 2009 年度から 2011 年度までの 3 年間とした。変動が激しい中国社会の状況を考えると，研究に一区切りをつけることができる 3 年という時間が適切である。

本研究では研究代表者の佐藤が保安語積石山方言の調査研究を担当し，研究分担者である角道が土族語互助方言と土族語民和方言の調査研究を担当した。

佐藤が担当した保安語積石山方言の調査研究については，2009 年度から 2011 年度までの三年間，毎年約 10 日間，甘粛省臨夏回族自治州積石山保安族東郷族撒拉族自治県大河家鎮において現地調査をおこなった。この調査は，西北民族大学大学院を修了した保安族の若手研究者，馬沛霆をはじめとする保安族の人々と連携する形でおこなわれた。

具体的な研究方法は，次のとおりである。

（１）保安語積石山方言における全体像の調査
- ①調査項目の整理と準備
- ②現地調査
- ③収集資料の整理と分析
- ④論文作成
- ⑤報告書の作成

（２）現地社会への還元
- ①『保安語漢語辞典』の作成

角道が担当した土族語の調査研究については，2010 年は青海省互助土族自治県にて，2011 年には北京市にある中華民族園にて調査をおこなった。それぞれ約一週間，土族と連携し，土族語互助方言の音声，語彙，文法調査と言語の全体像を把握する調査がおこなわれた。

具体的な研究方法は，次のとおりである。

（１）土族語互助方言における全体像の調査
①調査項目の整理と準備
②現地調査
③収集資料の整理と分析
④論文作成
⑤報告書の作成

また，土族語民和方言については，現在利用できる Todaeva,B.X (1973)，照那斯図 李克郁(1982)， Slater, Keith W.(2003)，XianZhen(2001)，Chen Zhaojun et al(2005)等に記載されている語彙の整理をおこなった。

４．研究成果

研究成果について，主な研究成果，研究成果における国内外の位置づけとインパクト，今後の展望の順に記す。

まず，主な研究成果を述べる。保安語積石山方言の研究成果と土族語の研究成果を分けて記す。

保安語積石山方言の研究成果としては，次のものがある。図書を二冊公刊した。その一つは保安族の若手学者である馬沛霆とともに作成し，保安族文化網から公刊した収録語彙数約二千語からなる『保安語漢語詞典』の試行版である。この辞典に採用した保安語を表記するための文字は，佐藤と馬沛霆とで考案したピンインに準拠している。保安語積石山方言には文字がない。辞典を国際音声字母ではなくピンインに準拠した表記で作成したのは，将来のことを考えてのことである。国際音声字母は多くの人にとって読めるものではない。現在，この辞典に語彙を補充し，例文を加えた改訂版を出版する予定で準備している。この文字によって保安族の民話などを書くこと，さらには民族語教育に使われることが期待されている。

もう一つは，白帝社から公刊した保安語積石山方言のテキスト集，『保安語積石山方言のテキスト』である。ここには保安族の古老，馬福全によって語られた下記テキスト六編とその語彙集が収められている。

（１）保安腰刀
（２）トリガガ
（３）トリガガとして語られた話
（４）婚姻
（５）大工とその妻
（６）トダーエヴァのこと

国際音声字母で記したテキストには形態素分析を，それぞれにグロスを付け，日本語訳を付けている。

馬福全の豊富な知識を反映しているこのテキスト集は保安語積石山方言におけるはじめての本格的なテキスト集であり，民族学的にも価値があるものである。

論文は，三編。一つ目は，「保安語積石山方言における程度副詞moɢləとgɑについて」（その漢語版が「关于保安语积石山方言中的程度副词moɢlə 和gɑ」）である。保安語積石山方言における程度副詞moɢləとgɑにはともに「とても」という意味があるが，両者の間には「他のものと比べて・・・」という意味合いを含意するか否かという違いがある。moɢləはgɑとは異なり，「他のももと比べて，とても・・・」という意味を持つことを明らかにしている。

二つ目は，「保安語積石山方言のとりたてと主語を表す mu」である。ここでは，接語である mu の意味機能を論じている。接語の mu は，不定語に後置されると全称を表し，名詞に後置されると，類似複数，限界，文の主題，談話の主題，対比といったさまざまな意味機能を表すことを明らかにしている。

三つ目は，「保安語における 1 人称代名詞複数の包括形と除外形の区別」である。ここでは，保安語積石山方言における一人称代名詞複数における包括形と除外形の区別を論じた。一人称代名詞複数における包括形と除外形の区別は，前者が話し手側に聞き手を含むのに対し，後者は話し手側に聞き手を含まないというのが教科書的な区別である。しかし，保安語積石山方言ではそうした教科書的な区別に加え，話し手が属する特定の集団を表すときには聞き手の存在にかかわりなく包括形が使われる。このとき聞き手は話し手が属する集団に含まれるのではなく，話し手が属する集団とは関わりが無いものして消極的に無視されるからである。

土族語における研究成果ついては，特に二つを挙げておく。

そのひとつは，現在利用できる土族語互助方言と土族語民和方言の資料から語彙を資料ごとに整理した『土族語語彙集』である。ここには，以下の七種類の語彙が収められている。

（１）Volksdichtung der Monguor 語彙
（２）Geser Rëdziawu 語彙
（３） 丹麻方言語彙
（４）天祝方言語彙
（５）紅崖子溝方言（Karlong）語彙
（６）土族語日本語辞典
（７）日本語土族語辞典
（８）民和方言（Mangghuer） 語彙

もう一つは，「河湟語の子音の有声化と無声化」である。この論文では，河湟語における子音の有声化，無声化を解明し，子音の無声化に関して，次の九つの点を明らかにしている。

（１）子音の有声化，無声化の点でも土族語民和方言は土族語互助方言と最も近い。

（２）子音の有声化，無声化の点では康家語は東郷語と最も近い変化を起こしている。一部は保安語と近い変化を起こしている。
（３）Hattori の扱った土族語互助方言の那龍溝方言には逆行異化，有声化の変化を起こした語が多数見られるが，他の下位方言にはほとんど見られない。
（４）Hattori の 4）5）では説明のできない語が土族語互助方言の別の資料には存在する。
（５）Hattori の主張する祖語の*z は根拠がない。
（６）保安語で逆行異化，有声化が起こっているのは同仁方言のみである。
（７）東郷語の Todaeva の資料は他の資料よりは古い段階を反映している。
（８）Svantesson の preaspiration の移動による語頭摩擦音発生の説明には例外が多い。
（９）清格爾泰の主張，*q と*γ 及び*k と*g の区別がなかったことを主張するためには，河湟語だけではなく，モンゴル諸語や方言におけるこの子音の有声／無声への分化を無理なく自然に説明する必要がある。

次に，研究成果における国内外の位置づけとインパクトについて述べておく。

鍾進文（2007）『甘青地区特有民族語言文化的区域特征』中央民族出版社のなかで詳細に述べられているように，佐藤がこれまでにおこなってきた保安語積石山方言に関する研究と，角道がこれまでにおこなってきた土族語に関する研究は中国でも高い評価を受けている。二人の研究により保安語積石山方言と土族語の研究は飛躍的に発展しているといっても過言ではない。

また，本研究で，あるいはこれまでの研究よって構築された人間関係について，特に指摘しておく必要がある。今後の調査研究にとっても，築きあげた良好な人間関係は不可欠である。

最後に今後の展望について記しておく。佐藤の保安語積石山方言に関する研究は，2012 年度からも 3 年間の予定で，基盤研究（C）『モンゴル系の危機言語，保安語積石山方言にかんする調査研究』として，これまでの研究を引き継ぐ形で続けられる。モンゴル語の歴史研究のみならず，言語接触研究，証拠性，一人称代名詞複数の包括形と除外形の区別など一般言語学の発展に貢献できそうな興味ある現象もいくつか見つかっている。こうした点も従来からおこなっている語彙調査，テキスト収集に加え取り組むべき課題であるといえる。

土族語については，特に民和方言の調査研究を推し進める必要がある。この土族語民和方言については，角道が継続して研究する予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
1. 佐藤暢治　馬沛霆，保安語積石山方言における程度副詞moɢləとɢɑについて，東アジア言語研究，13 号，査読有，2012，pp. 1-6

2. 角道正佳，書評 Faehdrich, Burgel R. M. (2007) Sketch Grammar of the Karlong Variety of Mongghul and Dialectal Survey of Mongghul, xxx+330, University Microfilms，日本モンゴル学会紀要，42 号，査読有，2012，pp. 63-72

3. 角道正佳，河湟語の子音の有声化と無声化，大阪大学世界言語研究センター論集，4 号，査読有，2010，pp. 1-28
http://ir.library.osaka-u.ac.jp/metadb/up/LIBRIWLK01/riwl_004_001.pdf

4. 佐藤暢治　馬沛霆，关于保安语积石山方言中的程度副词 moghle 和 ge，西北民族研究，4 期，查読有，2010，pp. 188-191

5. 佐藤暢治，保安語における 1 人称代名詞複数の包括形と除外形の区別，東アジア言語研究，12 号，査読有，2010，pp. 46-55

〔学会発表〕（計３件）
1. 佐藤暢治，保安語積石山方言のとりたてと主語を表す mu，日本モンゴル学会，2011 年 11 月 19 日，大阪大学

2. 角道正佳，土族語東山方言の特徴，近畿音声言語研究会，2011 年 10 月 1 日，西宮市大学交流センター

3. 角道正佳，河湟語の子音の有声化と無声化再考－土族語民和方言及び康家語の位置づけ－，近畿音声言語研究会，2010 年 2 月 6 日，西宮市大学交流センター

〔図書〕（計４件）
1. 角道正佳，中西出版，土族語語彙集，2012，594 頁

2. 佐藤暢治，広島大学，「消滅の危機に瀕した中国甘粛省，青海省のモンゴル系孤立諸言

語にかんする調査研究」研究成果報告書，2012，53 頁

3.佐藤暢治　馬沛霆，保安族文化網，保安語漢語詞典，2011，63 頁

4.佐藤暢治，白帝社，保安語積石山方言のテキスト，2011，110 頁

６．研究組織

(1)研究代表者

佐藤　暢治（SATO NOBUHARU）
広島大学・北京研究センター・准教授
研究者番号：９０２６３６５７

(2)研究分担者

角道　正義（KAKUDO MASAYOSHI）
大阪大学・日本語日本文化教育センター・教授
研究者番号：３０１４４５３８